幼稚部3歳児における子ども同士のかかわり合い
～劇遊びを通して～

杉山　砂寿

幼稚部３歳児クラス担当時、様々な形態での再現・表現遊びを行ってきた。その遊びの一つである劇遊びは、子ども達が豊かなイメージをもち、主体的に楽しみながら参加できる活動であると考える。クラスの活動の一つとして、日常的に扱ってきた劇遊びを通して、子ども達がかかわり合う力が育まれるよう、様々な場面で扱い方を工夫し、子どもに合わせて配慮しながら取り組んできた。本研究は、３歳時期に継続して扱い、実践してきた劇遊びの一例を通し、子ども同士のかかわり合い方の成長や、活動の中での教師の配慮や意図について探ったものである。

【キーワード】　劇遊び、自発的、主体的、かかわる力、イメージの形成・共有・表現

1　はじめに

幼児の活動は、生活と遊びが主体となっている。幼児は、自分から様々な物・人・出来事に興味・関心を向け、それらにかかわり、考え・感じ・心を動かし、あらゆる物事を結びつけ、気づき・覚え、それらを表現し、また様々な物・人・出来事などに関心を向け～というサイクルを繰り返し、総合的に様々なことを学習していく。（図１）

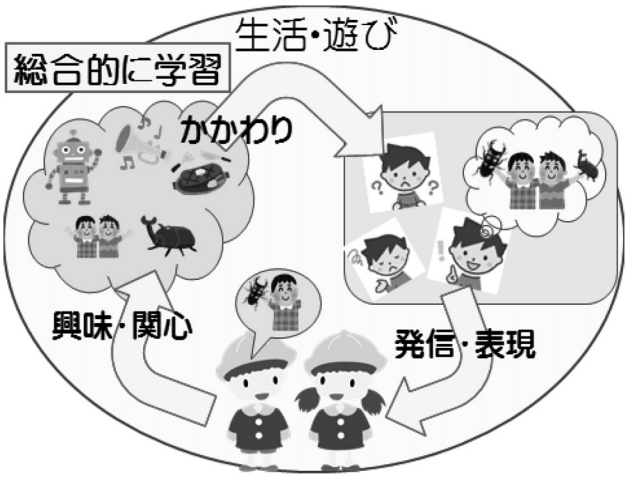

図１　幼児の学習サイクル

本研究では、子どもとのかかわりの中で、周囲のことに自発的に興味、関心をもつことを大切にし、その中で心を動かし、自由に伸び伸びと表現しようとすることを大切にしてきた。また、個々の成長や理解の仕方についても配慮しながら活動を行ってきた。子ども自身が、様々なことに対して豊かなイメージをもちながら、生き生きと子どもらしい表現をすることができるよう、環境の構成や活動の組み立てなど、細かな配慮をしてきた。

本研究は、劇遊びを通して、教師の様々な取り組みや配慮、意図を掘り下げ、それに伴う子ども達の成長や変化の様子を追ってみたものである。劇遊びを展開していくにあたっては、いくつかの段階があると考える。まず、何かをきっかけに興味・関心を向けかかわり、『イメージを形成』する段階、そして、考えたことや感じたことを発信する『イメージを表現』する段階、そのイメージを少しずつ確実なものにし、やりとりをする中で周りと『イメージを共有』する段階、共有したイメージを『発展して楽しむ』段階に分けられると考える。（図２）

図２　劇遊びの段階

２　劇遊びの組み立てや配慮

（１）　豊かなイメージの形成

イメージを形成する段階で大切にしたこと
- 子どもの興味、関心に合った絵本の選択
- 絵本の楽しませ方の工夫
- 子どもが絵本に親しめる環境作り
- 子どもの表現の共感的な受け止め方

イメージの形成は、劇遊びを作り上げていく上で一番大切な部分だと考え、導入には時間を十分にかけた。一冊の絵本を繰り返し何回も楽しんだり、同じ題材の絵本を何種類も読み聞かせたりすることで、徐々にストーリーを理解したり、話の展開を予測しながら楽しんだりする様子が出てきた。その結果、各場面の絵の読み取りや、内容の理解も徐々に細かく、深くなっていった。題材によっては、市販のDVDや手作りの指人形、エプロンシアター、ペープサートなども用いることで、個々のイメージが、より豊かに形成されたと考える。

子どもが個々に興味を示す部分は様々であったため、それぞれの楽しみ方、見方を認め、子どもからの表現を引き出しながら、教師と子どもの間で共通の動きや言葉でイメージを共有し合うことを大事にした。それぞれの子どもの楽しみ方や、物の見方を認め、子どもからの表現を引き出すことを繰り返し行い、教師と子どもの間で、動きや言葉でイメージを作りあげていくことに配慮した。そうすることで、一人一人のイメージがしっかりと形成されていくと同時に、それらを見ている周りの子どもも同じイメージを持ったり、同じ表現をしたりすることで、通じ合えるという実感を持つことができる。この段階で、子ども同士の直接的なかかわり合いはなくても、自分から興味を示し、取り入れ、考え、心を動かし表現をしているということは、はじめにの中で述べた幼児なりの学習を行っている状態と考える。

（２）　イメージを表現する

「大きなかぶ：なかなかぬけないよ。」

イメージを表現させていく段階で大切にしたこと
- イメージの動作化
- 場面の切り取り
- 小道具の工夫
- 個々のイメージに基づく自発的な役作り

登場人物や話の流れについての豊かなイメージを元に、子どもは自分なりの表現方法で発信してくるようになった。短い場面での教師と子どもの一対一のやりとりを他の子どもへも示しながら、徐々に絵本の登場人物に入り込んで楽しめるよう誘っていった。印象的な場面では、子どもが的確な表現をしてくるようになった。一方、どう表現して良いのか分からない場面では、教師が場面に合った表現を提示することもあった。教師に誘われながら、同じ場面で同じ動きや言葉を繰り返し使用してくことで、絵本の一場面をイメージしながら、伸び伸びと表現する様子が見られるようになった。また、子どもが絵本の場面に入り込めるような小道具を使うことで、動作化の意欲も高まり、簡単な劇遊びの一部分を意欲的に繰り返すことができた。この時期には、教師が一人一人に丁寧に対応しながら、他の子どもも巻き込み、次に述べるイメージの共有につながっていくことをねらっていた。子どもに“やらせ

る”のではなく、子どもの表現をきっかけに“巻き込む”という感じである。また、同じ動き、言い回しを使用し“馴染ませる”ことで、イメージの共有へスムーズにつなげていくことができると考える。

（３）　イメージの共有

「三匹のこぶた：おおかみ、こわーい！」

イメージを共有していく段階で大切にしたこと
- 全体で共有可能な場面の選択
- 子ども同士が確実に分かり合える手段
- ストーリーの整理

それぞれの子どものイメージを整理し、全員が意味を共有できるやりとりを繰り返してきたことで、子ども達は、話の流れや役の特徴、心情、因果関係、場面のイメージなどを理解するようになった。教師対子どものやりとりを、意図的に子ども対子どもに移行させ、今までの自然なやりとりの姿を残しながら、子ども同士で楽しめるようにしていった。その中で「全員が共通に分かり合える場面の選択」をすることや、「子どもがストーリーを追いながら参加できる劇の構成」を作ることに配慮した。実際にこの段階に至るまでは数ヶ月という期間が必要だった。長い期間をかけてきたので、話しの内容は十分に理解している状態のため、ポイントを押さえ、３歳児の子ども自身が自分たちでやりきれる程度を目指した。３歳児期は、子どもからの発信は教師にだけ向いていることが多いが、この頃の様子からは、劇遊びの中で、「チョーダイ」「アリガトー」「シュッパツ」など、子ども同士で掛け合いをして演じ合っていたり、リズムを合わせて言ったりしている姿が多く見られた。

（４）　劇遊びへの発展

「ももたろう：おだんご、ちょうだい。」

劇遊びを発展させていく段階で大切にしたこと
- 大道具、小道具、舞台
- 環境の設定
- 台詞や動き

ペンダントやお面、簡単な衣装、場面の変化をつけるための大道具や小道具、簡単な舞台などを用意することで、子どもの参加意欲が更に高まった。その結果、益々ストーリーに入り込み、役になりきって楽しむようになった。また、役の交代を自由にさせたり、同じ役を複数でやったりしながら、繰り返し遊ぶことで、どの役になっても楽しめる状況を作ることができた。その中で、自分のやりたい役を主張したり、順番が回ってくるのを期待して待ったりすることができるようになった。『劇』となると、つい、しっかりと役を決め、間違いなく演じさせることに力が入り、よくできた、言えたことなどを良い評価としがちだが、そうではなく、楽しんで行うことや、繰り返し楽しむことをねらった。どの子がどの役を演じても楽しめる状況を作ったり、やりたい役を思う存分やったりする中で、自分の気持ちを主張したり、順番が回ってくることを楽しみに待ったりする様子も出てきた。また、友達の主張を認めたり、友達の主張から、自分の役を考えたりする様子も見られるようになった。子ども同士でかかわり合うという場面が増えた時期であった。

３歳児期なので、台詞はあまり難しい言葉は使用せず、生活の中でも使用しているようなものを選んだ。しかし、「オニタイジ」「オウチヲタテヨウ」など、劇の中でしか使わないような台詞や言い回しも

取り入れ、リズムを合わせながら一緒に声を出すことも楽しんだ。同じ題材を繰り返し様々な形で扱ってきたため、全ての役の特徴を掴み、ストーリーも理解できていた。そのため、演じるための暗記や練習は必要なく、遊びの一つとしてリラックスした状態で演じることができたと考える。

3　考察とまとめ

3 歳児の劇遊びを通して感じた子ども同士のかかわり合いで大事にしたいと考えていることについて下へ記す。

・子どもの個々の発達や理解の状態を十分に把握すること。
・子どもに合わせながら活動の導入をすること。
・子どもの興味、関心に合った活動内容や教材の準備、選択をすること。
・題材は単発で扱うのではなく、子どもの様子に合わせながら、様々な形で継続的に活動に取り入れていくこと。
・子どもが興味、関心を向ける環境への配慮や設定。
・イメージ作りのための細かな配慮や教材の魅力的な扱い方。
・子ども一人一人の十分な理解を促すための細かなステップ作り。
・子ども同士のやりとりの楽しさへつなげていくためのイメージの共有化。

聴覚に障害のある幼児の言語表現、言語獲得においても、遊びを通して人や物とかかわる中で、様々なことを感じ、考え、自由に表現、発信し、また自分からかかわろうとする自発性、主体性が大事だと考える。

今回、劇遊びを通して、3 歳児の子ども同士のかかわり合いを取り上げるにあたり、劇遊びだけではなく、劇遊びと同様のステップが他の様々な遊びの中にもあるのではないかということに気がついた。遊びは多種多様であり、一般に〇〇遊びと名前のついている遊びはもちろん、遊びという名前がついていなくても、子どもにとって生活や活動は、遊びの一つと考えられる。しかし、どの遊びを取り上げても、まずは子どもの様子を把握することが第一であり、その上で、環境の設定、教材の選択、準備、子どもの見方、感じ方、考え方、イメージのもち方をしっかり見極め、子どもの世界を深く理解することが重要であると再確認できた。（図３）

図３　子どもの実態把握～環境・教材準備

そして、子ども同士のイメージの共有、楽しいやりとり、気持ちの通じ合いなどが、子ども同士の豊かなかかわりにつながっていくということが分かった。劇遊びという設定された場面において、子ども同士のイメージの共有が可能になったことで、気持ちの通じ合いの心地よさ、やりとりの楽しさなどが引き出され、子ども同士が生き生きと自由にかかわり合える姿につながったのではないかと思われる。その中で、たくさんのやりとりを行い、たくさんの言葉を覚え、それを手段に、またかかわり合いが増え、豊かな言語での通じ合いというものにつながっていくのではないかと考える。（図４）

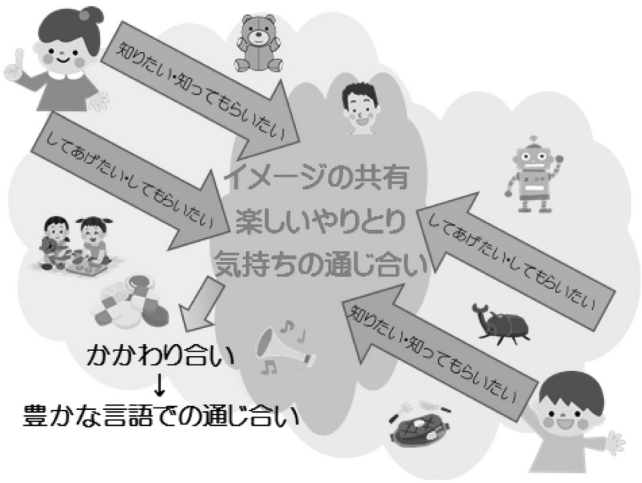

図４　豊かな言語を育てるために